

神戸が丸焼けになる

地震発生後八時間たった十七日午後、

神戸市長 笹山幸俊(七〇)が指揮を執る市庁舎一号館八階の災害対策本部から、東灘方面に数条の黒煙が見える。神戸上空を舞う市消防局ヘリ「KOB E3」の機長武田敏則(四四)からの「二十数件の大きな火災」の第一報以来、火勢は全市をなめつくすのでは、と感じるほど勢いを増す。長田方面が深刻だ。都市計画一筋に歩いてきた笹山には、黒煙のすそ野の街並みが手に取るようになった。

長田区では十七件の火災が発生していた。①「大道通二」②若松町三③川西通一④御蔵通五、六⑤菅原通二⑥松野通三、四、水笠通五、六⑦日吉町五、六、若松町一〇、一一⑧東尻池町七⑨西代通四⑩重池町二⑪大塚町二⑫梅ヶ香町二⑬長楽町四⑭日吉町二⑮細田町四⑯久保町五⑰大道通三、御船通四——長田区役所を中心に半径一・五キロに集中していた。

長田消防署はどこから取りかかっていいかわからない状態だった。当直責任者の救急係長、鍵本敦(三三)は大橋出張所を含め、ポンプ車四台とはしこ車一台のすべてを投入した。四か所で防火水槽の水を使って消火を始めたが、どうにもならない。近隣の西、垂水、水上各署の七台が応援に向かう。だが、壊れた建物が

幅四、五メートルの道路をふさぎ、たどり着けない。

立ちふさがるのは、壊れた建物だけではない。西署の司令補永谷忠司(五三)らの消防車は須磨区或町の民家火災現場で立ち往生した。「この火事を無視して、どこへ行く」。消防車の前で両手を広げる住民を捨てて、長田には行けない。

火に包まれていた家のあちこちで、悲鳴が上がっていた。長田区役所西南一・五キロの日吉・若松町の鷹取商店街。桑野富弥(四七)の洋品店では母寿美子(六六)が崩れた一階に閉じ込められた。「母さん、はってくるんや」。父照次(五五)も叫んだ。「足が挟まってる」。迫ってくる炎。「二人とも逃げてや」。寿美子の声が炎にのまれた。イカナゴをたぐのが上手な母だった。

百八十メートル離れた自宅から喫茶店「不二家」に駆け付けた山崎賢一郎(四五)。壊れた一階で母信子(七七)がコーヒーマグの湯をわかしっていたはずだ。「おふくろ」。炎の向こうから返事は来なかった。商店街わきでも、火に飛び込もうとする玉島和子(四四)を長女裕子(二九)が、必死で抱き留めていた。がれきに、長男の太田中三年雅行(二五)が挟まれている。「母ちゃん」。言葉が消えた。

一人暮らしでたばこ店を営む坂根一市(六六)と履物屋の森田あい(二五)、美容院

の田中二郎(六七)、喫茶店の山下重子(四八)、電器店の岡田晴美(五五)、パン屋の高橋修(三九)、林理容店の太田中三年(二五)もがれきの下にいた。「隣の晩のおかずがわかる」と言う古くからの商店街。七十店舗、約二百十人の家はすべて火の中にあった。

神戸市ではこれまでも大火があった。

六千九百五十平方メートルを焼いた六八年の有馬・池之坊満月城、六千二百八十九平方メートルを焼失した七四年の長田区の神戸デパート。いずれも自前の消防車七十台以下で鎮圧した。

だが今回は違った。全国の消防車が来てくれないと、とても消せない。神戸が丸焼けになる。「至急、至急、応援を」。現場からの無線が鍵本に届く。各地から来てくれれば、何とかなる。それが現場や鍵本の考えだった。だが、もつと恐るべき現実が待っていた。



鷹取商店街跡

店舗数は70軒。商店街の中央には、幅8メートル、長さ100メートルにわたって白い日よけテントが続いていた(神戸市長田区で、2月3日撮影)